【ディスカッション】

●第三者のまちづくりへの関わりを考える

大島：

お話をお伺いしていると、例えば六原では、学生の方や各種専門家の方が参加されている。成逸では石本さんのゼミが参加したところからスタートして、専門家として石本さんが関わり続けている。神戸市の駒ヶ林では松原さんがもう 16 年､行政の制度を使った形で、専門家が参加しておられます。地域の方の意識と活動と組織等々が大事であるのは大前提ですが、第三者がいかにして関わっていくのかというところも、もしかしたらこれからの時代、ポイントではないかと思います。先ほど室﨑先生のお話にあったように、特に京都の場合は観光客、要は住んではいないもののそのまちに滞在しているような人たちの存在も配慮しなければならないと思うのですが、例えば第三者もパワーになるという観点から考えると、室﨑先生どうでしょう。観光都市としての観光客の迎え方や、共存の仕方など、何かあるものでしょうか。

室﨑：

観光客にまちづくりに参加してくださいとは、なかなか言いづらいですよね。そうすると観光客の気持ちを代弁したり、観光客と密接に関わっているお土産屋さんやお寺の住職さんなどをまちづくりの 1 つの主人公として迎え入れていくということが大切だと思います。従来のコミュニティというのは、そこに住んでいる人たちだけで、まちづくりをやろうとしたわけですが、コミュニティの中でも高齢化が進んで、若者が減ってきているという面もあるし、色んな人が交流人口として入って来る状況にあるので､まちづくりの主体の考え方をもっと広げていく、そこに何らかの形で関わり合っている人を、同じ仲間として一緒に議論していくということが必要なのではないかと思います。即、観光客というのは無理にしても、観光客と密接に関わっている人の意見も聞いていくし、逆に言えば、そういう人たちにルールを守ってもらうということをしないといけない。まさに民泊などで､家の所有者が東京などにいると、どうするのかという世界が生まれるわけですが、まさにそういう人たちと考えるということです。コンビニとか、ガソリンスタンドとか、郵便局などはまちづくりではとても重要なファクターだと思います。

大島：

駒ヶ林 1 丁目の取組について、松原さん以外に、外部から来られている第三者的な方はいらっしゃるのですか。

松原：

駒ヶ林 1 丁目の中だけでは、主として私が関わっているだけですが、駒ヶ林は 1 から 6 丁目まであって、その全体でまちづくり協議会という形で進めています。5 年くらい前から､2 丁目や他の所に若手のアーティストの方などが、下町に魅力を感じて移住して来られました。実はその方々はまちづくりにも関心があって、地域で何かイベントがある時に、地域と協力したようなこともあり、またその人たちが地域の中にあるアートの意義を感じておられたりして、最近はまちなかの防災広場の計画にアーティストの方が入ってきて、地域の人と一緒に考えていくとか、まちづくり協議会の定例会の中にそういう人たちが入って来るとかいった形に、徐々に変わってきていると思います。

ですから最初は第三者的な存在は私か、私の関係者が中心でしたが、今は全然別の人たちが入ってきて､徐々に変わってきているように思います｡また、そういう第三者的な人が入ってきた方が（ちょっと無責任な言い方になりますが)､面白いものに変わっていく、新しいものに変わっていくという印象は、確かにあります。

大島：

そのアーティストの方が来られたというのも、この地域が自分たちの創造活動にふさわしいかもしれないというアンテナが立ったから来るわけですよね。だから何か動きがあったり、魅力を感じる地域・まちには人の新陳代謝が生まれてくるように思います。

そういう新しい人たちを巻き込んでいく工夫は、例えば菅谷さんのところでは何かされていますか。第三者ではなくて､新しく住まれた方という意味です。

菅谷：

京都は敷居が高くて入りにくいとよく言われますが、六原のエリアで言うと、割合受け入れやすい環境になっていると思っています。私は地域の力は、自動車で言うと、基本軽自動車かなと思っていて、やはり普通車に変えていく、エンジンを高めていく取組は絶対に必要だと思っています。だからこそ新しい人をどんどん入れていかないと発展していかないと思っています。

1 つの事例で言うと、引っ越しされて 1 年半で町内会長を引き受けられた方がおられます。その方がまちづくりの防災部会だったと思いますが、非常に興味を持ってもらえて、そのまましばらく活動を続けられたという経過があります｡そういう意味では、興味があるのであればウェルカムで一緒に活動しましょうみたいな土壌は、もうあるのではないかと思っています。ベースとして住民視点というのは非常に大事なのですが､「こういうことがあるから」と言って受け入れているのではなく､「こういうテーマがあるからやりましょう」という誘い方をしています。

大島：

成逸でも何かそういう工夫をされているところがありましたら、教えてください。

石本：

六原や神戸の事例のように、第三者がということではないのですが、例えば成逸では最近、地蔵盆が非常ににぎやかになっているのですが、建売住宅に入ってこられた方が、非常に面白いからと積極的に参加されるようになったためです。そういった形で第三者というよりも、まちに関心を持っていなかった人が、興味を持っていただくということを、一番の目標にしています。

また、成逸には北総合支援学校という養護学校があります。統廃合のなか、地域の皆さんが養護学校を受け入れるという選択をされ、結果的には入ってこられた当初から、その校長先生と PTA の会長さんたちと交流があります。北総合支援学校にとっても成逸学区とのつながりが、子どもたちや親御さんに安心感をもたらしている関係が、ずっとできておりますので、成逸の場合は、まずそこに住む人や働いている人が関わるということが特徴だと思っています。そういう意味では、第三者というのは、成逸の場合はあまりないように思います。

大島：

松原さんの所の駒ヶ林は小規模なエリアになると思うのですが、例えば道を整えることによって、家が再建なり、改修なりができるようになって、住民の方が出たり入ったりという新陳代謝は起きているのでしょうか。

松原：

路地の整備に対応してというのは、駒ヶ林近辺ではあまり動いてないのですが、ただ路地整備の仕組みは駒ヶ林に限った話ではなく、神戸市内で確か 40～50 本されています。データとしてお聞きしているのは、整備しない路地に比べて、倍くらいの速さで建て替えが進んでいるということで、新陳代謝の効果はあるのだろうと思っています。ただ新陳代謝で駒ヶ林周辺や長田の南部で感じるのは、むしろ空き家のリノベーションが新陳代謝の大きなきっかけになっている気がいたします。

大島：

それは要は事業地として見込んだ人たちの投資が始まっているということですか。

松原：

必ずしも事業性を目的として入ってこられるというものではないです。むしろ空間的な価値、下町という空間の価値に気付いた人が移住してくるという印象です。それは新しく建て替えてということではなく、リノベーションして住むということです。

大島：

では建物の健全化が図られていって、防災性についても徐々に改善されているのでしょうか。

松原：

そううまくいけばいいですけど（笑)。なかなかリノベーションと耐震をセットでやられるというのは（私が関与する限りはしますが)､必ずしも実情はそうではないだろうなというところはあります｡ただ、人が入るということは、とても重要だと思いますので、そういう面での防災性の向上というのは言えるかなとは思います。

●京都の歴史を活かしたまちづくり

大島：

室﨑先生のお話にもあったように、人の命を守るということと、文化を守るということは共存するのかという、とても重要で重いテーマがあるのですが、そういった京都ならではの命題も頭に置いていただきながら、それぞれの地域で取り組んでおられる内容を、「京都の歴史を活かしたまちづくり」というテーマで、最後に一言ずついただけますでしょうか。

菅谷：

例えば町並を残していくということは、その文化を受け継いでいくことに繋がると考えています。また、その中で関わっている人たちが活き活き暮らせる環境、まさに昔から受け継がれたまちを、そのまま次の世代に受け継いでいくということが、非常に大事だろうと考えています。ですから我々も今の状態を次の世代に受け渡すことが、それに繋がっていくのではないかと考えております。

大島：

まさに今実践されている最中ですね。その若い自主防災会の方のように、次のリーダーシップを取られる方が出てきているというのは素晴らしいと思います。

石本：

私は成逸を見ていまして、昭和 40 年代に自治連合会と社会福祉協議会とが一体になって、住民福祉協議会ができました。そういった京都でいうところの町衆、町内会やご近所づきあいの歴史が成逸ではずっと息づいています。そういった背景があるから、防災まちづくりが町内会単位でできるわけです。私はこれができるのは京都ぐらいしかないと思っています。実は私は 2 年前に福岡県に呼ばれて、成逸の話をしましたが全く通じませんでした。福岡県の町内会の範囲は、1 町内会 200～300 世帯で、私たちが言う町内会は多くても 50～60 世帯で、顔の見える範囲の話をしていたつもりが、聞いている方は全く違っていたという経験があります。京都の場合は、町内会、ご近所づきあいを活かした防災まちづくりが基本になっていて、それを今、成逸では実践しているということです。

大島：

上京区は住民福祉協議会という独自のカルチャーがあるなかで、かつ町内会として独立しているから、今の取組があるということで、やっておられる活動そのものが歴史をバトンタッチしていく事になるのかなと思いました。

松原：

京都の歴史と言いましても、私が話す余地がないくらい、重層性をお持ちだと思います。まちづくりに関連するところでは、歴史が積み重ねられてたくさんある重層性というものが、おそらく多様な参加の形を生めるのではないかと思います。歴史の重層性というのは、おそらく多くの人に参加の機会を生むチャンネルを用意していることになるのではないかと思いました。

室﨑先生のお話に、まちづくりは今まではどちらかというと、定住している人たち中心に考えていたけれども、非定住の人もまちづくりの中に捉えていかないといけないのではないかというご指摘がありました。例えば民泊で外国の人が日々たくさん来ているとか、見かけない顔が近くに来ているとか、色々ありますが、そういう人たちを繋いでいく時に、果たして何を考えたらいいのかということを、実は今日の事前打ち合わせでも考えていまして、シンプルですが、挨拶運動です（笑）。知らない人でも声をかけて挨拶する。外国人観光客でも顔を見たら挨拶する。そうするといざ何かあったら、「あ、あの外国人、朝あいさつした人や！」ぐらいで繋がれるかもしれない（笑）。挨拶運動の重要性を、防災の事を考える度に思い出しています。

大島：

災害は予知できないというお話でしたけれども、それに対する備えで、かつ今からでもできるものというのはまさに挨拶だなと思います。では室﨑先生、最後にまとめていただければと思います。

●まとめにかえて

室﨑：

1 つは今日お聞きした話は、皆、素晴らしい話なので、それぞれのコミュニティなり町内会の経験を、京都全体、日本全体に広げていく努力と言いますか、どんどん発信をしていくことはとても重要です。逆に言うと全国の良い事例をどんどん吸収していくということも必要なので、インターネットで色んな所の状況がわかる等、まちづくりに関する情報の交流のシステムを発展させていく必要があるだろうと思

います。

2 つ目は、京都はとても進歩的な、革新的な、古いからと言って古さに固執してないところが京都らしさの 1 番良い所なので、どんどん進化していってほしいと思います。先ほどお話した昭和 30 年代にできた近隣通報システムなどは画期的です。それは京都には次に行こうとするスタンスがあるからなので、京都の歴史を活かしたというのは、まさに「進取の気風」で、どんどん前に向かって進んでいくことだと思います。

だからそういう意味では新陳代謝のシステムをどうしていくのか。そういうことで言うと、狭い道路があって、建て替えができないというのはネックになっているので、それをどんどん変えていける力、あるいは環境をどうつくっていって、新しさを組み込んでいくのかというのは、むしろ逆に言うと、歴史を活かすということではないかという感じがします。

大島：

今回防災ということをテーマにシンポジウムを開催させていただいたのですが、京都というのは、政令指定都市では火災の出火率が非常に低いまちでもあります。それは出火の原因として放火が多いということもありますので、それだけ防災意識が可視化されているのだと思います。ただいつ起こるかわからない地震、天災についてはなかなか準備でききれてないところもありますので、それについては共助について、それぞれの地域で様々な工夫が展開されているところです。

京都市内では非常にたくさんの取組が展開されていますが、フロアに来られている方も、先駆的な取組をされている方がいらっしゃいまるので、いくつかご紹介、感想も聞かせていただきたいと思います。

昨年の 7 月に先斗町で火災が起きまして、非常に早い時期の消火に至ったわけですが、それをきっかけに新たに防災対策を展開されているということで、今日、先斗町のまちづくり協議会の事務局長の神戸さんが来られていますので、一言お願いいたします。

◆先斗町まちづくり協議会事務局長

神戸：

昨年の火事はやはり京都ではとんでもない事だったという思いはあります。NHK であれだけ放送されますと、「どれだけ燃えたんや」となりましたので、私たちも相当心配して、その後どうしようかなというところはありました。幸い先斗町に関しては、火事が起きた事で、よい取組ができたと思っていますので、ご紹介したいと思います。

先ほどのご報告にもありましたが、先斗町でも同じように細街路、そして二項道路で、建替えるとセットバックしなければならないという所ですので、高圧ノズルのホースのシステムを導入致しまして、ホースを連結させるということをしております。高圧ノズルを繋げますと、確かに 15mほど飛びます。普通の状態よりも圧がかかりますので、かなり有効な初期消火のツールになります。ただ、これは消防法上、消火設備として認められてないという問題がありますので、勝手にやっているということになります。

ところでこれは 12～3mのリールですので、それだけしか届きません。先斗町も袋路などがたくさんありますので、どれだけ繋げるかが問題になります。ホースの弱点は、基本メスとメスで、普通の状態では次のホースにはつながりません。しかし 300 円ほどのジョイントニップルをつけると繋げる事ができる。そうすると 40 ミリの散水栓の所から 60mくらい繋いでも、圧は落ちません。さすがに 100mになると 12m飛んでいたのが、9mくらいになるかなというところはあります。ただ、このシステムはとても有効で、先斗町区域に関しては、この夏で 100 本設置いたしました。1 つ 1 つのパーツは 400 円から 700 円で付きますので、きちんと揃ってさえいれば、かなり有効なまちの防火対策になると思いますので、よろしければどうぞ（笑）。

大島：

あともうお一方、最近活動を始められた聚楽学区の自主防災会の松村会長にお話しいただきたいと思います。

◆聚楽学区自主防災会会長

松村：

始めの室﨑先生のお話は、毎回お聞きしても目から鱗のお話でございました。

今日お話のあった近隣通報システムですが、実はうちの学区には 25 町内ございますが、そのうちの 5 町内にこれがついております。ただ、問題は通電しているかどうか（笑）。これは早速それぞれの御町内に行って確認させていただいて、さらに町会長の会議の時に、あとの 20 町内にもできたらつけていただきたいと申し上げたいと思います。

パネルディスカッションでは六原と成逸の防災の取組のお話をいただきましたが、手間暇、金、それなりにお使いになって立派なものをお作りでございます。我々もああいうものを作りたいという思いはあるのですが、一番問題となりますのは金の面です。まちづくり委員と自主防災会を兼務で現在やっておりますが、地元から全くお金はいただいておりません。ご近所の自主防災会等にお聞きしますと、それなりの金額をいただいて事業をしているということですが、前任の会長から引き継ぎの時に、全くお金はもらってないと聞きましたので、私の代でお金というわけにはいきません。ご報告のあったような資料をつくるにつけても裏打ちとなる予算は、会長等にお話をしていくらか出していただきたいと思っている次第です。

最後に、私どもでは 25 町内に消火器が 120 本ほどございます。ところが私が自主防災会の会長を引き受けた時に、消火器の所在や性能を調べたところ、8 割以上が泡の消火器でした。泡の消火器は阪神・淡路大震災の際、転倒して使えなかったとの話を力説し、粉末ないしは強化液の消火器に代えてもらうようお願いした結果、今年の春には各御町内の消火器が全て粉末の消火器に代わっておりました。こんなところが、私どもの実績かなと思います。

大島：

お金についても、自助・公助・共助があると思うのですが、自助はがんばって集めるとして、公助の部分で何かお役に立てる部分があるのか、足立課長お願いいたします。

京都市　足立課長：

先ほど六原学区でも紹介がありましたが、まちを安全にする整備費用については、5～6 つほどメニューを用意しております。そこで安全に避難できるように改善してもらうという仕組みもつくっておりますし、防災まちづくりを進めるには、専門家の協力も必要になってきますので、今、最大 3 年間は専門家派遣をして、地域と専門家と我々行政と一緒になって、取組を進めているところです。現在、14 学区で取り組んでいただいておりますが、だんだん増えてくる、これから継続していくなかで、これを我々としてどう支援していくのかというのは、これからの課題だと思っております。その辺は地域の方、専門家の皆さん、民間の事業者の方の意見も踏まえて、これから新しい防災まちづくりを考えていく必要があると思っておりますので、よろしくお願いいたします。

大島：

以上をもちましてパネルディスカッションを終了させていただきます。どうもありがとうございます。